



森林と人を 生かす知恵 157

地域材とデジタル加工がつなぐ、 新しいものづくりのかたち

岐阜県立森林文化アカデミー 講師 ● 渡辺 圭

森林文化アカデミー木工専攻では、これまで地域材をいかに身近に、そして無理なく使っていくかをテーマに、製材や乾燥、利用のあり方を模索してきました。今年度、新たにCNCルーターが導入されたことで、そうした取り組みに新しい可能性が加わりました。

CNCルーターは、コンピューター制御によって木材を高い精度で加工できる機械です。手仕事では時間がかかる加工や、形状の再現性が求められる部材も安定して製作することができ、近年は木工や建築の分野でも活用が広がっています。アカデミーでも、従来の手加工の技術を大切にしながら、デジタル加工を組み合わせることで、地域材の利用の幅をさらに広げていきたいと考えています。



写真①：CNCルーターによる加工風景



写真②：UDATSUMU 完成写真



写真③：UDATSUMU 裏面
(使用した樹種名の刻印)

このCNCルーターを使った最初の取り組みの一つが、ドイツ・ロッテンブルク林業大学のカイザー学長らが来校された際の記念品製作でした。一つ目は、学生有志がデザインを担当した「UDATSUMU」と名付けた木製のオブジェです。岐阜の町並みに見られる「うだつ」から着想を得た形で、CNCによる加工だからこそ可能な、シャープさと木の柔らかさを併せ持ったデザインになりました。学生自身が考え、試作を重ねながら形にしていく過程は、デジタル加工を学ぶ上でも貴重な経験となりました。

もう一つの記念品は、学内で伐採されたカツラの木を使ったペントレーです。



写真⑤：ペントレー裏側
(ロッテンブルク林業大学と
森林文化アカデミーのロゴ)



写真④：学内で伐採されたカツラを用いたペントレー

これまでも演習林や学内で伐採された広葉樹は、家具や備品として活用してきましたが、今回はCNCを用いることで、家具としては使いづらい厚みやサイズの木材を、無駄なく有効に活用し、小物として仕上げることができました。身近な場所です育った木が、形を変えて人の手に渡っていく。その流れを目に見える形で示せたことは、とても象徴的だったと感じています。

いずれの記念品も、県内の広葉樹を用いて製作しています。広葉樹は樹種が多く、一本ごとに性質が異なるため扱いが難しい面もありますが、その分、表情豊かで魅力的な素材です。CNCルーターをうまく使うことで、そうした広葉樹の個性を活かしながら、安定した加工や新しい表現に挑戦できるのではないかと考えています。

県内各地では、これまで十分に使われてこなかった広葉樹や、公共施設や公園などで伐採された木をどのように活かしていくかが課題となっています。アカデミーでのこうした小さな実践が、地域材の新しい使い道や人材育成の一例として、今後の森林・林業施策を考える上でヒントになればと思っています。

地域材の活用には、特別な設備や大規模な仕組みだけでなく、小さな工房や教育の現場でもできる工夫も必要だと思えます。これからも、製材や乾燥とあわせて、CNCを含む加工の工夫を重ねながら、地域材を無理なく、楽しく使い続けられるモデルを提案していきたいと考えています。

●詳しい内容を知りたい方は TEL (0575) 35-2525 県立森林文化アカデミー まで